

Minami Kyushu University Syllabus										
シラバス年度	2022年度	開講キャンパス		都城キャンパス		開設学科		環境園芸学科		
科目名称	環境植物論					授業形態		講義		
科目コード	710062	単位数	2単位	配当学年	3年	実務経験教員		○	アクティブ ラーニング	○
担当教員名	河野 耕三									
授業概要	<p>本授業では、長い時間をかけ進化してきた植物の環境との関係を、生理・形態・環境適応・生態・分類学的な視点からの学びを通じて、植物に関わる専門的職業人としての基礎知識を養い、応用できる能力を培うことを目指している。また、世界の植物群系 (Biome) を形成する植物たちの巧妙で不思議な環境適応の姿を、環境との関係において数多く実証的に見ていく事により、科学的、学際的な考え方を身につけ、持続可能な持続型社会の創造に貢献できる能力を身につける事を目指している。数多くの植生調査で得た具体的な写真や資料を多く引用していきたい。</p>									
関連する科目	事前の授業の中では、植物学、環境科学、植物生態学について、環境植物論の履修前に受講しておくことが望ましい。									
授業の進め方 と方法	毎回、授業内容に沿って作成された資料を基に、紹介・解説・質疑応答を取り込んだ授業を展開する。資料は、多くの植生調査研究で得た具体的な経験、集めた写真、資料等を取り入れる。特に、学生に対する発問や学生からの質問には随時対応するよう心掛ける。理解状況や授業に対する学生からの要望等を把握し、レポートの書き方や表現力の学習を兼ねたレポートの提出を求める。									
授業計画 【第1回】	1. 地質時代の気候の変遷と植物の適応進化									
授業計画 【第2回】	2. 植物の体の特徴									
授業計画 【第3回】	3. 環境に対する適応形態									
授業計画 【第4回】	4. 環境に対する様々な生育様式 その1									
授業計画 【第5回】	5. 環境に対する様々な生育様式 その2									
授業計画 【第6回】	6. 植物分類学の歴史と現在									
授業計画 【第7回】	7. 植物群落の相観と区分									
授業計画 【第8回】	8. 植物集団のとらえ方 (植物社会学)									
授業計画 【第9回】	9. 植物群落の構造・機能・立地									
授業計画 【第10回】	10. 気候帯に対応する植物と植物社会 (熱帯林～亜熱帯林)									
授業計画 【第11回】	11. 気候帯に対応する植物と植物社会 (東アジアの暖温帯林)									

授業計画【第12回】	12. 気候帯に対応する植物と植物社会（温帯林）
授業計画【第13回】	13. 気候帯に対応する植物と植物社会（亜寒帯林）
授業計画【第14回】	14. 気候帯に対応する植物と植物社会（高山植生）
授業計画【第15回】	15. 非成帯的ハビタットに成立する陸域・水域の植物社会と植物
授業の到達目標	1. 現存する植物を地史的・進化的・環境適応・形態分類的な視点から考える力が身につく。 2. 現在、地球上には多様な立地環境に対応して分化した多様な植物種が生育し、人間との関係性を含めた多様な植物社会を形成していることを、生態学的、植物地理学的な立場から理解できる。 3. 地球環境及び地域環境の持続可能な循環型社会の創造には、環境や植物社会の多様性が重要であることが理解できる。
学位授与の方針(DP)との関連	1. 知識・理解を応用し活用する能力-(1)／2. 汎用的技能を応用し活用する能力-(1)／3. 人間力、社会性、国際性の涵養-(1)
授業時間外の学修【予習】	授業中に次回の授業で使用する資料を配布する。次回の授業までに内容を予習(30分程度)をしておく。
授業時間外の学修【復習】	授業で学習した内容を振り返り、要点を整理(1時間程度)する。
課題に対するフィードバック	課題に対するレポート、授業内容や方法等に関する感想や意見等でフィードバックする。また、試験については評価後に返却及び解説をする。
評価方法・基準	以下の項目に基づいて評価する。 1) レポート・・・・・・50点 2) 試験・・・・・・50点
テキスト	毎回、作成した資料を配布する。
参考書	環境植物学(田崎忠良 朝倉書店)、植物の分布と環境適応(酒井昭 朝倉書店)、植物形態学(福原竜夫 福岡教育大学)、植物形態学(原襄 朝倉書店)、日本の植生(宮脇昭 学研)
備考	植物社会学を中心とする植生調査研究は1970年から始め現在に至る。調査地としては、宮崎県内はもとより全国、海外では中国の揚子江流域をはじめ韓国、台湾、東南アジア、インド、欧州ではドイツからイランに至る地域での現地調査の経験がある。